

「仏は如何なるものにか候ふらん」

——『徒然草』断想——

永 積 安 明

あるとき八才になったばかりの兼好が、仏とはいったいどういうものなのでしょうかと父親の兼顯に尋ねたところ、仏とは人

くなりまして、と人びとに語って面白かったというのである。これは兼好法師自身の回想になる説話で、『徒然草』の第二四三段つまり最終段に収められている、いわゆる「仏問答」として周知の一段である。

いったい『徒然草』の中に、兼好は自身自身のことを直接にはほとんど語っていない。だから『徒然草』は、『方丈記』の著者鴨長明が、わが身のことばかりを記しているのと対蹠的な作品になっている。ただ第二三八段だけは別で、この一段には、七

か条にわたって兼好自身のことばかりを書き留めている。しかもそれも「自賛の事」と題したいわば自慢話ばかりである。だから「仏問答」の一段も、この第二三八段の中に収めてしかるべきであるのに、この一条だけは特に第二四三段として独立させ、それも『徒然草』巻末の一章として収録しているのは、この物語が自賛のことであるだけでなく、特別の内容を語るものであつ

たといふのであつた。これはいわば自賛の物語であつた。

兼好の父兼顯が、「問ひつめられてえ答へずなり侍りつと、諸人に語りて興じき」と、この一段が結ばれているように、兼好の父は八才のわが子に問ひつめられてしまったことを人びとに語るとともに、わが子の人並みすぐれて明晰で論証的な才智のほどを誇らしく思ったことであろう。後年『徒然草』の一段としてこの思い出を記しとどめた兼好としても、これはいわば自賛の物語であつた。

たからではないだろうか。

もともと『徒然草』は、鎌倉末期から南北朝初期にかけて、代々神祇官として宮廷に奉仕した卜部家の庶流に生を享けた兼好が書きつけた、いわば人生いかに生きべきかについての思索の書であり、作者兼好の精神をささえる思想の核は、何よりも「仏」の教えであった。『徒然草』二四三段の中でも最初の三〇段くらいまでの部分を除いたその大部分は、彼が出家遁世した後記に記したものと認められるのだから、それだけ単なる人生論にとどまることのない、「仏」の教えをめぐっての試行錯誤を重ねた書となっている。だから兼好にとって人生とはという設問は、とりもなおさず「仏」とは何かを問うことにほかならなかったはずである。つまり「仏は如何なるものにか候ふらん」という八才の兼好の問いは、そのまま兼好終生の課題であったのだ。

ところで、この仏問答の一段は、軽妙な筆致で、きわめてユーモラスに語られているが、その内実はけっして軽いものではない。兼好の父兼頭は、「問ひつめられて、

え答へずなり待りつ」と人びとに語って、八才のわが子兼好の才覚を誇り、答えられなくなった自分については、とりわけ問題にしているのだが、この回想を記しとどめた兼好にとって、この問答は父とともに笑い興じてすまずことのできない内実を含んでいたはずである。「仏」とは何かという設問こそ兼好畢生の疑問であったし、若き日の宮廷出仕時代に垣間見た華やかな貴族世界から、ついに脱出して修学院に通れ、やがて叡山の聖域横川に年を越えて簞居し、「仏」の道理つまり無常の理を切実に求めた彼が、たえず問いつめてきた課題にほかならなかった。だから兼好にとってこの仏問答は、父兼頭と同じように座興として笑いますことができなかったのも当然である。「問ひつめられて、え答へずなり待りつ」という父の言葉は、そのまま兼好の応答でもあったはずで、とりわけ『徒然草』を書きつけ、そのいたるところで無常の理を説示し仏理を究明しようとしてきた兼好が、やがて『徒然草』一巻の筆を収めようとしたとき、この「仏とは如何なるもの

にか候ふらん」という設問に対して、どのように応答すればよかったであろうか。父のような座興としても、また第二三八段の回想のような「自賛の事」としてもすまずことのできなかった兼好は、このとき幼年時代の仏問答の体験を想起し、素朴なしかしそれだけまた根源的な、「仏とは如何なるものにか候ふらん」という、彼にとって也容易には答えることのできない設問によって、『徒然草』を終結しようとしたのではなからうか。しばしばユーモラスで軽妙な筆致のもとに原本的な人生の課題を提起してきた兼好が、久しい間書き進めてきたその随想録の結びともなる最終段落を、この設問によって閉じるというのも、まことに心にくいばかりの巧みな着想であったというべきで、「つれづれなるままに……」という姿勢でもって書き進められた『徒然草』一巻も、この一章をえて、はじめてみごとに完結することができたのではないだろうか。